

悦詒七部集

巻みの

三

中村俊定文庫
文庫 18
687
3





晉其角序



那潜乃集つる事古今より
 わらりて道れおまへ起通
 き時たれや幻術の事一也
 しそろれ白り魂そ入さ通
 らゆえよ極めさるに似る
 海一久一々世よさる
 毛く人ようりて不愛れ愛



を志し〜じ五徳のつゝよ及こ
 ばんをさ〜つ過さ〜ぬ〜た
 こたり彼ぬの上人代骨り
 てんを作〜し〜詳〜れ
 多〜留を吹〜し〜になん結さ
 とりされ分る人よ成て結さ
 せ〜も五の詳の〜れさ〜ぬは
 及魂の法代をあらう〜のよ信ふ

屋成さ〜したち〜る代入さ〜し
 しアイウエツら〜く〜ひ〜ま〜さ〜
 い〜ゆ〜れ〜ん〜吟〜詳〜し〜を〜あ〜ぬ〜過
 一〜只〜離〜譜〜も〜魂〜代〜入〜し〜れ
 一〜こ〜ろ〜と〜し〜我〜翁〜行〜脚〜乃〜了〜ん
 伊〜賀〜越〜し〜を〜さ〜し〜山〜中〜よ〜く
 猿〜り〜小〜養〜を〜着〜せ〜し〜離〜譜
 乃〜神〜を〜入〜ぬ〜ま〜し〜い〜今〜れ〜を〜た

ちまも新腸たおきんを
ふも神あまに懼るまふ
術ちりく我をえりく
集をつくくく様その
付中しあまきり是く
れんくしり魂を合せ
ん兆乃ほ一きりちり
ま

本書

猿蓑集卷之一

冬

初く我猿を小蓑をほり也 芭蕉
あまきりくあまきり夜城の 其角
時ふもあまきりく 千那
幾人くく我のあまきり 僧 丈州
鏡持のねねりく 膳所 正秀
くあまきりくあまきり 史邦

舟人のあはれきりし 尚白

伊賀の境より

や奈良の隣乃一時 曾良

や早稲ついで 凡兆

竹田の里や 乙羽

早稲の支や小夜 羽紅

新田の稲穀 昌房

いづれや沖の河を 去来

いづれや北の山 百歳

いづれや動の地 野水

後

いづれや舟の甲 其角

いづれや舟の甲 同

いづれや舟の甲 凡兆

いづれや舟の甲 嵐蘭

いづれや舟の甲 芭蕉

あふけを延きけつるのをよまを 凡兆

たのしみ

掉麻のこまありゆき枯ゆきれ 伊賀 土世方

流禱をたつらて通ふ十夜外 膳所 裾道

ちやのくぬやけりくくあきと呉屋女 伊賀 越人

よのむほ茶あふゆよおきりり 猿錐

古ちけ筆貫子も垂りし冬りもえ 凡兆

公羽の登田よ筆指をよめ

難炊のあきとんがくハ冬こもり 其角

こ乃多きと牡丹のふれんまの裸 伊賀 車乘

草津

あ日さるさけいさるのこくれ 尚白

神逆水にさるらうるほれ 珠碩

霜月朔旦

接すらふよ物あし 赤拍 伊賀 良品

水き月れあを替へや水仙よ 羽島 不玉

今世をたのむに... 尾張 貝菓

尾張の... 去來

一、夜く... 探丸

... 尚白

茶湯... 龜翁

炭竈... 九兆

住つぬ... 芭蕉

寝ころ... 其角

門前... 九兆

本鬼... 尾張 苾境

... 伊賀 半殘

貧交

ま... 大州

浦... 曾良

あ... 去來

糖... 史邦

脊門口乃入江よのほるちをくれ 支州
いし道々雪よまききて鳴千鳥 千那
矢田のゆも浦のあつれは鳴ちる 元北
筏たれんる跡や鴛鴦の中 本節
水底をこんてまゝ魚の小鴨哉 文州
ちんちん寝をくわゆる余吾の湖 路通
死まて採成らん鷹はくか 貝葉
襟まてり首引入る冬月 杉風

天本戸や鎖のされて冬月 其角
かゝ志りた蒲團くちりや冬の旅 長崎 暮年
見やるとん旅人さし 石部山 大津尼 智月
翁の御れちりまの衣をよめる 義濃
らる記あり略く 竹戸

題竹戸之衣

魚のけ袴乃やるせがと秋分 探丸
魚のけ我のまけあゝ紙衣 曾良

志のこゝに教珠のひのす 彌代書 史邦

赤白砂を候す

膝つゝよむしこまらり居る霞のれ 史邦

桜樹の葉は教は狂ふありけ 野童

鶴乃橋らりこほす雨教のれ 示蜂

呼ふよと舞賣ふんふあられけ 凡兆

こころの海もそりや朝飯の出来ど 膳所 晝好

こころのちや内へ居たりれ人へ待 其角

初音よ響都座のうく朝顔 史邦

ちかやけのふみ吹くちも音まけ 羽紅

ちかもみちの丸み教のこ舞まけ 探丸

下京やちうむしとほく夜れる 凡兆

ちか〜と川一筋やちうのふ原 同

信濃路をさる〜

ちかちかや植屋は花の如し 芭蕉

草庵の留に花さし〜

妻老の髪もあはれと巻れど
其角
きれ目、竹の子籠うはらりる
尾張 羽立
許よとも健あふ、さるれよん
長崎 卯七
いりりてちや言ひあつて
去来

青田追悼

乳のこもに世を解くも隔た
尚白
う、魁も元也の慶をきれ内
芭蕉
鈴、記懐ハ都、似ぬとも
乙卯

一月のあゝ米も世をくらへよ
又州

住吉奉納

夜神糸や鼻鼻白一面の内
其角
節季候よ又のこむ事しれ
伊賀 須琢
あ、やうらひやまじよ
同 祐甫

乙卯、新巻よ

くの家をこゝせよ、あ、年忘
芭蕉
弱法師、あ、門ゆ、せ餅のれ
其角

たろ上

歳の夜昔曾祖文を写けふ多枕 長和
 うす望れ一室の空あり一の音 去来
 らきてゆ事娘まうけや伊勢の 同
 大くやまはまうけくくく 羽紅
 やりくねく又やまうけくく 其角
 い孫のくくくくくく 路通
 多のく我破進袴比銭くく 杉風

猿蓑集巻之二

夏

有明の面みくすやにきく 其角
 夏にすくくくくく 木高
 ねを様よくくくく 芭蕉
 時きくくくくく 尚白
 けくくくくくく 凡兆
 しんくくくくく 智月

蜀魂たぐや木のつた角櫓 史邦

入おれしきよの中をけしき 羽紅

けしきよのけしきよのけしき 文州

ふたき代官後やけしきよ 去来

こしきよを我塚てのけしきよ 奥羽遊女

松島一見のけしきよのけしきよ 曾良

さきよのけしきよのけしきよ 芭蕉

旅館庭せきしき
けしきよのけしきよ

あけぬきしきよのけしきよ 膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

あけぬきしきよのけしきよ 其角

あけぬきしきよのけしきよ 全峯江戸

別僧

あけぬきしきよのけしきよ 来囊花ナニノハナ 越人

あけぬきしきよのけしきよ 珠碩

翁は侍られてすまふ
しりし

似合しきりけのこまねの里

亡人
杜國

まらさき句わけのま

嵐蘭

井たすきよはくしり杜の

半殘

起せくゆまきねぬ
朝の回乃

起くのこころはまつ

仙化

題去来之疑 峨洛柿舎

巨極の知の本魚屋を名起す

元祖

破垣やわらわし麻子たがし道

曾受

南都旅店

誰のこころはたれ乃園此桐

千那

洗濯やまのよきとて也極めま

尾張
傳定

豊國よて

竹の子た力を得しゆり入る

元祖

多けは子や白濁しり懸る

去来

たけのこや稚まゆの孫たし

芭蕉

猪ノ吹入さうくさうく 正秀

明石夜泊

晴きやうくぬき 芭蕉
君の代や筑摩奈を鍋一ツ 越人

五月三日

しるし

石の音とまきく 高蒲や 其角

粽はふかきふかき 額髪 芭蕉

隈藻の廣きふくし 餅粽 岩翁

さききたる客人やまじりけ 尚白

五月六日大坂より死の
遠忌を吊ひて

大坂や刀ぬき 蝉吟 作賀

真茹の館

箕草や兵九つは先乃跡 芭蕉

這出よわい屋下 此蟻の跡 同

け境をいひしるし

かこつかり角かりまけ 浪平の石 同

五月あゝ家あり控てあゝ
元兆

しほまはれ味なもあやかり
又節

るとの謂はありさつと雨
史邦

奥羽を取の郡よ入て申治まの
の塚はつとくよやこつ物竹のうし

道ふり一里まらりたり乃方
笠治つとくあまよまるとまゆ

わつとまよる五り海いさる
あつとまよる

笠治やいつとみればあゝり道
芭蕉

大和紀傳のさくいそあゝ
て往東の形れをいさる

すめりまの六料はつとく
紙のつとく書つてつとく

つとくもいさるあゝり
去来

髪利や一夜よ今情よみり
元兆

目の道や羨れくさ月あゝ
芭蕉

待地や若もさくもあゝり
羽紅

七十余の老醫今まうりつとく
斗まよるころりてたつとく
にいさるのむをけつとくを醫
いさるつとくつとくよ見志れ
る人よあゝつとくつとくハ長よの
あゝいさるつとくつとくハ

廿二年よこらうとらとまか
ゆらりりりりり

六尺七カヤ〜や五月あえ 其角

百種も妻よ取つく茶摘可 去来

志〜もや茶山〜はあぬれ 正秀

つふ合子あれ〜や妻白鳥 游力

孫と愛〜

妻某れ家〜やらん雨蛙 智月

妻出果て難道〜山あゆ 花紅

志〜川の関〜

月流の〜りや奥け田挿〜 芭蕉

出羽の〜とあ〜

眉掃をよ面影〜とね粉のよ 同

法隆寺用帳
南無佛のまをを拜す

法袴れ〜き〜る粉のよ 千那

田の畝れ〜つ〜り〜れ 伊賀 万宇

膳所曲水之樓〜

螢火や吹とくはまきし蟻のやと 去来

夢田乃螢つん二句

闇の夜や子た泣きと螢の 九兆

いもつん花船酔くはつれ 芭蕉

之熱野へ流るも時

長崎

螢火やこゝろうろくま八鬼尾谷 田上尼

あけらよ蟻と 日ありあはぬも 尚白

草むしや百食ハ中こゝろの魚 半残

病後

大坂

おつらやのらふつゝ 百食のふ 何処

すけやあふりきり百食の花 乙扇

蟻蚊辞を作

子やなん其子の母を蚊の喰ふ 嵐蘭

饑別

ととすや蚊屋のうらぬ旅の宿 里東

うらぬ人よつれ
糸穿するは者よつれ

猿蓑集卷之三

妹

梅月や運なち〜よ花一

不知
讀人

此句東武よりきたり

素堂

かひくちのけり初も齒や松の風 杉風

芭蕉居よ何よおれや妹の風 路通

人よ似〜猿もまゝと廻りか 珠碩

加賀乃全昌寺に宿す

終夜枯のきくやまのこ

曾良

芦原や踏鳥の寝ぬおを輝の風

山門

あまのやみ平鬱令留れ枯のゆ

凡兆

く川露や猪の臥芝の起あふり

去来

大比叡やこもぬお草のてぬき

野童

と雲らりて跡とわれもや和の雷

凡兆

文月や六りもなみの夜よ似す

芭蕉

合歡のよれなまういよ合意のけ

同

七夕やあまのりいふくはるぬへし

伊賀小年
杜若

こやこよの信まういさり相撲取

去来

朝のほとち寝眼をちのちりりし

伊賀
風姿

雲のやめこの葛又けいしとす

膳所
及肩

笑ののほよをよとほ木槿のし

嵐蘭

よな魚をけくても川木槿の

秋風

よのたれしるもけしとねくれ

千那

しほのねくぬめさるきや姫殿雨 史邦

そよぐや藪の口らり卯あじ 且業

秋風やとくもさほくうくくす 子尹

迷い子の親めくろや下もい原 羽紅

八瀬はりに遊びして業
くらの文あけの序あは

まよきく揚乃先代原られ 凡兆

アアアアアアアアアア
ふらふらおせにふて

思ふとくもさほくうくくす 去来

草刈ようれり思ひく三枝の末路 李由

え禄二年翁又伏せしき
こちのくくくくくくくく
り柳くくくくくくくく
くくくくくくくくくく

いつくまきたれ跡も萩の末 曾良

桐の末にうくくくくく 色蕉

百舌鳥あくや入日くく 凡兆

初層より終るれまうくく 啓悟

上

下

望田より

痛属れ後さしむあて極の色黒

海との舟を小海老よまのい回

加賀のふきとくらや又多田乃
神社の宝物とてくまの
うまうま草一乃うとて回く
錦のきれをききとて斗な
うまのあより懐くよおゆと

ひんかし甲のたきあくす 芭蕉

築島や二層花中の虫黒尚白

く〜いかりや望よまの夜は月よ 風巻

いかにあつと〜と〜と

葉月や名鶴よ海の人とらん 亡人 千子

ここの月に蝨のあつて紙のくり 之道

粟稗も月を皮あらぬと月 半残

月えせん体見の鶴乃拾部 去来

公羽をそ草か書よおゆと

たも〜うう松笠の〜と〜月絶 伊賀 土北方

猿蓑集卷之四

春

梅咲て人の怒乃悔をあら 雨露沾

上鴈の山莊よりうつくしき

候しちりりて

梅の香を山路隔入るなむらさ 去来

しんぞの香やふ入異半の角 句空

庭真

梅の香を山利も流る各真 土芳

よき〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜

夢さして又一句の音ほの梅 嵐蘭
 百八の〜〜〜〜〜の〜〜 其角
 くら〜〜〜〜〜の〜〜 去来
 野宮や序越の〜〜摘る葉 史邦
 くら〜〜〜〜〜の〜〜 嵐南
 音は〜〜〜〜〜の〜〜 如行

憶翁之客中

裾のく〜〜〜〜〜ん草枕 嵐雪
 つ〜〜〜〜〜の〜〜 路通
 七種や跡〜〜〜〜〜 其角
 家や〜〜〜〜〜の〜〜根芽 丈州
 う〜〜〜〜〜の〜〜 其角
 脈〜〜〜〜〜の〜〜 同
 鈴〜〜〜〜〜の〜〜 去来
 鶯の音踏〜〜〜〜〜 一桐

伊賀

雪やしら座一みりれ志しりりり
江戸 溪石

うらりりやを海ありれりり
其角

鶯や下座の齒よつく小田代上
凡兆

雪や空よ久ちをよすりりりり
伊賀 魚目

やめの雪を柳よりりりりりり
江戸 探丸

けし溜りりりりりりりりりりり
江戸 ト宅

けりりりりりりりりりりりりり
江戸 遠水

けりりりりりりりりりりりりり
尚白

青柳の志しれりりりりりりり
伊賀 一嘆

ちりりりりりりりりりりりりり
江戸 木白

待りりりりりりりりりりりりり
揚水

回れりりりりりりりりりりりり
在り

雪やしら座の志しりりりりりりり
色蕉

うらりりりりりりりりりりりりり
越人

うらりりりりりりりりりりりりり
去来

雪路はりりりりりりりりりりりり
餘寒の當座

其のよきものなりしめ羽織ハ 龜公羽

おのよきものなりしめ羽織ハ 尚白

出らるる櫃よきものなりしめ羽織ハ 龜公羽

そと下ゆきものなりしめ羽織ハ 嵐雪

骨紫のよきものなりしめ羽織ハ 凡北

白真や酒言ハ下敷のよきものを 其角

くものよきものなりしめ羽織ハ ^{尾張}松峯

まきものよきものなりしめ羽織ハ え志

陽炎や取つものなりしめ羽織ハ 荷分

あけのよきものなりしめ羽織ハ 百歳

うらやまのよきものなりしめ羽織ハ 土方

よきものなりしめ羽織ハ 氷同

野るものなりしめ羽織ハ 凡北

ふけのよきものなりしめ羽織ハ ^{伊賀}色蕉

いとよきものなりしめ羽織ハ 配力

狗脊のよきものなりしめ羽織ハ 嵐雪

彼岸よりとむる一夜二おの 路通

よのしややちたありとて涅槃像 野水

花並ぬ裏ハ燕乃かうい道 九兆

まことく今や紀のうへにその層 伊賀 沢雉

春ぬや年のふ草ふ花はあぬ 嵐虎

うしよよ科し

まるやうらりやるそく法門 猿錐

不性と金かこ起しれまのぬ 色集

春ぬや田養のしれ鑑賣 史邦

しるよのあしや軒よあむ 羽紅

泥垂や田代水の壁うらん 史邦

蛸こしる本舞の竹や虫の糞 昌房

振翁や下座よはまるとち年此雛 去来

善行よこすれ雛の写巻のふ 伊賀 萩子

桃柳くらりありとやをんあれ子 羽紅

うくれま境よのぬきしり 三河 鳥巢

里人の暗居しるる田畑られ 嵐推

蝶のまじりて一と夜を寝よるり首の 半残

帝の鳥切て白根の嶽をの末の 桃妖

いらのほりこころもすもや療 園風

日の影やこころにれよの親すめ 珠碩

花の露ぬむし妻のすもや縁の先 土芳

南のたや果なまらうとてあけ衝 芭蕉

越らり飛浮へおとて籠の
つらりおのりてあけ衝

あけ衝
とまらうとてあけ衝

鶴の巢の樟の枯枝よ月よぬ 元兆

うまらうらうらうらうらうら 石に

子や結ん餘りそよなぬきああり 杉風

いしらあけ申れ拍子や短きああり 芭蕉

芭蕉菴のうらまを訪

蓬草小錦流しあけやこれ 曲水

木尻筋旅しとてあけ拍子ああり 山店

畫讚

山吹や夕後の焙炉は白く待 芭蕉

白玉はあまたつく桂の乳 車来

わらわらわらわらわらわら
あつたれは髪けりつらんのお
しらつとつとつとつとつ

竹タケもろくそ昔やちらり桂 羽紅

蝸牛やよどきつとつとつ 坂上氏

うぐいすのさきつとつとつ 芭蕉

もろくそつとつとつとつ 伊賀 利雪

東叡山よりあつた

小坊主や昔よあつたつとつ 其角

一枝はゆめはつとつとつ 尚白

雛の糸はもさつとつとつ 凡花

まきんよつとつとつとつ 丈艸

馬場のつとつとつとつ 史邦

中津よつとつとつとつ 千那

葛城のゆきをまじりて

粧ふるやまはゆかり神の顔 色蕉

この国は垣のたはりのついで
南にたつハ空橋は新し又附
らまきとると云傳へんらん道
我し

一里のまじりて花亭のふゆりや 同

亡父の墓東武谷中にもうた
三歳して死れを一年のぼろの
城よりうらぬ墓のおもふ橋柱を
つらう一かみく母に抱くこと
つらうこれ橋をたつては後を
他の墓にたつては死にたつて

まうやのち吸ふ野の往還り 園風

知人よあまのこゝろありんれ 去来

あま僧の煙り一あめ熱れ 凡兆

浪人のやま

嵐を帯りて夜あれう花靨 半残

睨きこゝれをち結ばしは 伊賀 長眉

これの奥もよ
このは海をみ

大寺やうた奥乃あめ果 曾良

道灌山よのぼる

る澁やまのぼるのぼるのぼる 嵐闌

源氏の強きこと

標子に夜ちるふれまじりし 羽紅

一庚午の歳家を結と

後よりりしきるる花はらりしは 北枝

まらりしや伽藍の樞やまの 凡兆

酒棠おかしき満より夜の日 普船

大和の脚のり

草即ちちりるはれぬのよ 芭蕉

山や躑躅のけり尾のよ 探丸

やうつら海よらんやの日 智月

鬼角しておまつかし 山川

鷺鳥のおすうらりしは 式之

木曾塚

其よのぼるのぼるのぼる 乙羽

春風夜をよめる御殿の堂は然 曾良

望湖水惜春

ゆきまをよめる御殿の堂は然 芭蕉

猿蓑集卷之五

去来

鳥の羽を刷ぬまらしと我

カイツツエ

一ぬきし月夜よの集志のまら 芭蕉

股引一の朝つむろ川にまら 允兆

たぬきまらしとすお條張のまら 史邦

まらしとすお遠く家書月 蕉

人よめられす名物乃梨 来

四十一

瘦骨代すゝ起幽の力なき
 隣をくりにて車引こじ
 うまをを枳殻垣よりぞ
 いまや別めかき一出す
 せうけい掃てうらを信
 地をい切くる飛をいふよ
 青天よ有明月の影りけ
 湖水の秋乃比良代らるる
 蕉 来 邦 兆 来 蕉 兆 邦

紫のやや蕎麦めすまれ歌をよ
 ぬのこ若お智ぬ月影夕らま
 押合つて寝くハ又きつうり
 くられや乃まゝの赤きを
 一掃鞆つゝる意のしれ
 枇杷のちなまにまきり
 邦 兆 来 蕉 兆 邦

去来 九

三十一

芭蕉 九
凡兆 九
史邦 九

凡兆

市中ハ物のよほら也其月
ありしくとんく乃勢 芭蕉
二番草取の果は種よき 去来
原くしりくくくあ一投 兆
けし助ハ銀のん志しす不自由は 蕉
たきとくしに長き根指 来

草村又蛙こはくのくまの道

兆

落乃せはるりにけりゆす

蕉

道心のむらあはあれたるむ時

来

能やれ七尾の冬は作らさ

兆

魚の骨志りある道の老をそ

蕉

待人入一小時の鐘

来

まくり屋風を倒す女子

兆

湯屋の竹の葉子侘し

蕉

苗香れまを吸るるの嵐

来

傍やとしく寺りく

兆

さるの格とせをゆる様月

蕉

年一に一年の地子もや

来

五六七とよつげの家三ツタテ儲

兆

足袋のくまの黒はる

蕉

追うて早よ去る乃刀持

来

ららるる何よ水はほり

兆

戸澤子もむらさきの賣袋
 えんききりきりきりきり
 こころの草鞋をばくし
 登りさしきりきりきり
 そのまじりきりきりきり
 ゆりみりきりきりきり
 草庵の暫く居るあやう
 いのち嬉しき撰集れきり
 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉

さききりきりきりきり
 はせの果てきりきりきり
 あにありきりきりきり
 けりきりきりきりきり
 まじりきりきりきりきり
 けりきりきりきりきり
 来 蕉 兆 来 蕉 兆 来 蕉

凡兆 十二

芭蕉

十二

去来

十二

凡兆

灰汁桶のきやごりまら

あかしのやうきやごりまら

新巻あかしの月うけ

あかしてあかしの十のころ

糸代あかしの物をあかしの子

あかしのあかしのあかしのあか

芭蕉

野水

去来

蕉

兆

京出くははる餘る其りの物

来

唐耶らるる和はるれり秋

水

中よりはるるすはるる風薫

兆

煙のふはるるはるるはるる

蕉

まのふらるるはるるはるる

水

近口はるるはるるはるる

来

金銀とくはるるはるる

蕉

あつ月はるるはるるはるる

兆

町の秋はるるはるる

来

何はるるはるるはるる

水

花はるるはるるはるる

蕉

まのふらるるはるるはるる

兆

名
えはるるはるるはるる

水

柴はるる家のむらるる

来

あつはるるはるるはるる

兆

旅の地はるるはるる

蕉

丁より南に女代智恵もくもく

来

何れより南に後乃ちたもく

水

夕月夜星の蒼き山は鹿島

蕉

人のちよわくあつあつ水

兆

うそつら自慢いそくおほ

水

又もたより此節をな出す

来

隈より田の青やさくいそ

兆

加え成乃やう六独と社あり

蕉

抱うりた尻流さくも葉すて

来

雨のやよりたすき市迅速

水

層林より春踏鳥の糸たな

蕉

志らんく水は菡萏うらん

兆

糸操娘いしんよはなよら

来

更りよ三月曙乃ちく

水

九兆 九

芭蕉 九
野水 九
去来 九

餞乙卯東武行

芭蕉

梅の影まわりとけ春のさけ
かさあしりしと春の曙
乙卯
むね存ありと甲乙と持たる也
珠碩
志しき旅よてよれよと
素男
川隅よ虫歯くそと居る月
刀初
二階の窓よとれよとあそ
蕉

放やううつうた踏んづるの母
 編の屋敷に乃力なきうせ
 ちうしんた初まにける鏡舞ふ
 心花頭よと叫ぶうた
 卯の割乃箕まに並ぬやめ方
 すまきる木の志のうた
 萩のれしうたのれよま
 花うしうる百舌るよ二勢
 智月 刃 男 碩 品 蕉 碩 男

懐よまをさあやむる娘の月
 けさうまうぬあのはつら
 鏡の柄よまうらりよるふのれ
 灰まきうらうすおりの跡
 喜れ目よはま舞てくる雛机
 店屋ゆうたのまうり
 汗ぬくうたのまうりの糸
 うたれせうまの雛乃下
 凡兆 刃 去来 兆 正秀 来 半残 土芳

大騒よみまじりておのれを
 身いわれ汝の取所をま
 小刀乃拾取りて細工し
 棚よ火とりす大年の夜
 うらまゝにわらへ使も後
 りの折合せをさるる如
 此の友のいれをまじりて
 碧油糸をせまじりて月
 芳 残 園風 猿 残 風 雛

嘆きの隣はらうと撮つて
 海はうらまゝにうらまゝ
 新やうと踏をまじりて
 一すまをある糸の割下
 花よ又ととけつてまじ
 雛の被をまじりてまじ
 芳 風 嵐 蘭 史 邦 野 水 町 紅

芭蕉三

乙羽	五	土芳	三
珠碩	三	園風	三
素男	三	猿錐	二
智月	一	嵐蘭	一
凡兆	二	史邦	一
去來	二	野水	一
正秀	一	羽紅	一
半殘	四		

猿蓑集卷之六

幻住菴記

芭蕉州

石山乃奥岩向のうろよよ山を
 園分山と云ふれは園分古の石を
 傳ふたふへは林廓の細き流を流
 して翠平微よ及る中へ三曲二百歩
 には八幡宮ありたふし神体
 ハ弥陀乃る像とて唯一の家あり

甚忌むる事とを两部光成和の
 利益益乃塵を同うたたまふ
 又貴一曰比々人の諸さりたれハ
 いとく神さし物さつらある傍よ位
 捨一草の戸さしよき根を軒
 をとくこをよきり聖さるて物押
 婦一とをさるり幻位養と云あ
 の僧あうハ勇士菅沼氏曲水子と

伯父よあん侍り一を今ハ八年
 ち一よ成りてよ幻住さくめを
 のと強さるり又市申あさ
 十年計りてみ十歳下ら
 身終養中めくのを先ん
 家を離て真羽る歌沼の
 下一画をさしよきよ
 くらき北海の荒磯よ

破りてと歳湖水の波は漂鳥の
浮巢の流とらまきくさすれ一本
乃陰多のそしく軒鴛鴦あふぬ
え垣の結流あもしくお月れ
初いこつらめた入一あやうと出
しとさくやましくぬさけよ春
のうらたもあましくつー咲ゆり
山あききこぬく河もまきしくさす

行宿りし鳥れ後さくもよまつさ
のけいさくまきり
いもとうけし真一て魂呉楚東
南よしく身ハ瀟湘洞庭よさる
しきて未申よろこもしくあき
りしにゆり南薫空あふりねり
北風海を渡しく涼一日枝の山は良
れさる根より亭傍の松をききこりて海
も橋も釣さるあまもさるりよけふ

木樵のひり舞のふ田よ早苗とる
奇雲のたふの雲のたふよ水鶴は
お音義景地とくくめくくく
わく申よの三よ山よいせ奉れ侍よ
わくして武をねく古よ拙よふ
いてくく田よ山よ古人をくくぬく
く山嶽千たの寄袴腰こくく山よ黒
侍の雲のくくくくくくくくくく

よりくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
寄よ遠のほり松の棚作業の因を
よめくく積の腰掛とく名付彼酒棠
よ果よくくくく主簿寄よ巻を
結く王公羽徐佳の徒よあく唯睡
群山民とくくく顔よ是よく
山空山よ思よ拍して産ス

里の竹のこた入まうそいのまろ稲
 らいあー兔の豆細よりあや
 歌あさめ農談目靡よ山の端よ
 うもさ夜に雁歸よ月を結てい
 歌を付ら燈をと取ての因雨よ是歌
 をささすいこいこいさあめよ
 深寂を好こい野よ跡をかくて舞
 とさあささやい病を人よ傳てを

をいこい人よ似より借年月れ
 移る拙を身れ科をまよよ
 あああは官愈命れ地まよ
 やいこい佛離祖室の扉よ入
 ら舞いささああささああ
 よあまをせめ花鳥多情を芳し
 暫く生涯のさあわすよああ
 孫よすれあまよ一筋よつ子

くる樂天ハ五體く神をやり老栴ハ
瘦より賢愚文質のこころ
こころいつまう幻の拙をこころ
ゆきいけくぬぬ

とんどのし推れあのこころ

題芭蕉翁國分山
幻住庵記之後

何世無隱士以心隱為賢
也何處無山川風景因人
義也間讀芭蕉翁幻住庵
記乃識其賢且知山川得
其人而益義矣可謂人与
山川共相得焉迺作鄙章
一篇歌之曰

琴湖南兮國分嶺

古松鬱兮綠陰清
 茅屋竹椽總數間
 內有佳人獨養生
 滿口錦繡輝山川
 風景依稀入誹城
 此地自古富勝覽
 今日因君尚益榮

元禄庚午仲殊日 震軒具州

儿右日記

海鳥脊中入てやる林扉の如 曲水
 とくまゝんた跡たつとやまのふ 野水
 鶏もた〜〜〜めあゝ鶏た〜〜 去来
 海へ五月雨うぬや〜〜〜 凡牝
 軒ちらよ名梨や〜〜〜後のお 千那
 細脰たや〜〜〜やまのやま 珠碩

贈紙帳

物よりの紙地よりと綴りあり 野徑

ハシヨシト路の爲なりとあり 里東

虫花をよみよりのあり 膳所 乙羽

顔や岸乃中れ花より 膳所 怒誰

白や一帯より結し 膳所 探志

五羽六羽菴よりありとあり 膳所 元志

木つとたわしとありとあり 膳所 泥土

笠あより帽よりとありとあり 史邦

月約や海を尻尾よりとあり 正秀

志つらとありの系洗し清如 云人 柳陰

涼さるるにまうし椎々也 如行

訪よ留らあり

権のよきとありとありとあり 膳所 朴水

目下下やるはぬ程とありとあり 膳所 市隠

文よとありとあり

接所まや早苗のつらとありとあり 半残

麦乃粒をよむ産す

一袋これや鳥羽田のこころ 麦 之道

書音

一隻入るふさくらや粒のすき 長崎 魯町

夕立や梅木の奥れ一志さうり 及肩

昇袿腰掛

梅ゆや田とふはくらさうり 尚白

贈蓑

志々木のまこあしみのし 北枝

木履わく侍ふくらり 末節

包紙の書

膳所

袴よすす茶袋や 扇

縮のふくれを佛ね 智月

石ふやけく果下 羽紅

桶の輪やまねて 冒房

里ハいさく 何処

晴やいづく塔はほろりあつて
越人

越人といふはつたふて

筆の交れ借よ飛入菴の
等哉

明年跡生尋旧菴

春のあやみよの星すうたはつ
嵐蘭

同其

涼しきりるをさへ任はる
曾良

跋

猿蓑者芭蕉翁滑誓之首韻也
非比^{スレニ}彼山寺偷^ニ衣朝市頂冠笑
只任^{スレニ}心感物写興而已矣洛下
逸人凡兆去来随翁遊学棋館
竹窓躡等凌節斯有歲屬撰此
集玩弄無已自謂絶超^{スレ}狐腋白
裘者也於是四方嗟友憧々往

下
七三

來或千里寄書々中皆有佳句
日蘊月隆各程文章然有昆仲
騷士不集錄者索居竄栖為難
通信且有旄倪婦人不琢磨者
廉言細語為喜同志雖無至其
域何棄其人乎哉果分四序作
六卷故不遑廣搜他家文林也
維貶元祿四稔卒未仲夏余掛

錫於洛陽旅亭偶會兆來吟席
見需記此支題昏尾卒援毫不
揣拙庶幾一藁高張有補干詞
海漢人云

夙狂野衲

丈牝漢書

正竹書之

京寺町二条上牛

井筒屋庄若衛板

